

〈受肉〉の表象

—George Herbert の宗教抒情詩を読む

畠山悦郎

I. はじめに

George Herbert (1593-1633) の *The Temple* に収められた宗教抒情詩の中にはキリストの「受肉」をテーマにしたテキストが幾つか存在する。これらは、多く、暗喩によって表現され、この作家の詩人としての技巧を特徴的に示すと同時に、彼の信仰観や救済観を直截に反映しているように思える。今回は、この「受肉」に関係した比喩表現に着目し、その中でも、従来、「受肉」との関係がほとんど指摘されてこなかったもの、あるいは指摘されることはあっても解釈が曖昧であったものを取り上げ、再考してみたい。

II. “Vertue” を読む

4 連構成、全 16 行から成る短詩。1～3 連は、それぞれ、“sweet day,” “sweet rose,” “sweet spring” に対する呼びかけで、それらの「はかなさ（短命）」が詠じられ、最終第 4 連で、「唯一有徳な魂のみが永遠の命を得る」と結ばれる。主題は、いわゆる、“memento mori” と言ってよく、各連最終行の “thou must die” のリフレインが印象的である。

従来のこうした一般的解釈に疑問を差し挟むつもりは全くない。ただし、この詩には、もう一つ、主旋律としてのこうしたテーマの背景に、いわば

通奏低音のように響く別のテーマが流れていることを指摘したい。問題は最初の2つの連。まず先に第2連を考える。バラの短命をうたったこの連は、美術史でいう“vanitas”のテーマをも想わせる。“Bids the rush gazer wipe his eye” (6) は、あるいは、情熱的な一時の恋（または青春）（のはかなさ）をも暗示していよう。が、同じこのバラのもつ宗教的寓意に留意するならば (e.g. Carlo Crivelli および Bernardino Luini などの『聖母子』), キリストの受難（ゴルゴタ）の場面との重層性を指摘できるかもしれない。この箇所“rose”を修飾する“angrie and brave”がもつ内包は（*OED*の指摘[“angrie”=“red”]にもかわらず）深いのではないか。また、上記1.6の「目を拭う」も、単に「バラ（女性）の美しさに驚き、見とれる」以上の（宗教的）含みがあろう。翻って、第1連に戻る。この箇所呼びかけられる“sweet day”は“The bridal of the earth and skie” (2) と譬えられている。遠く地平線のあたりで天地の境も渾融して見えるほど澄み、晴れわたった情景の謂であろうか。しかし、この箇所にもまた、キリスト（の生涯）に関わる暗示がありそうに思える。第2連が「受難」とするならば、この連は、すなわち、「受肉」の表象、と言えるかもしれない。キリストの受肉は、「婚礼」（“bridal”）の暗喩によって聖と俗のつながりを示唆することは言うまでもない（Eph. 5: 31-33）。また、それは、必然的にキリストが負わねばならない死を予表してもいる（“The dew shall weep thy fall to-night” [3]）。つまり、この詩は、キリストの「受肉」と「受難」（端的に言えば、その生涯）を凝縮し、さらに、明らかに「最後の審判」を想起させる最終連を加味すれば、これは、ある意味で新約聖書をコンパクトにまとめたようなものと言えるのかもしれない。たった16行の技である。

「〔罪ゆえの〕はかなき命…それゆえ徳高く生きよ」、確かに、それが、この詩のメイン・テーマであろう。が、その「はかなさ」の意味が重い。「キ

リストのごとく」, という暗示が通奏低音に乗って響く。Herbert という作家は、「受肉」に始るキリストの物語を一編の詩に丸ごとパッケージ化することがよくある。今回は触れないが、他に“Redemption”などが参考となるはずである。

III. “The Pulley” を読む

神による人間の創造時のことが、神を語り手として物語られる、4連20行の短詩。内容を要約すると、神は最初、人間に“strength,” “beautie,” “wisdom,” “honour,” “pleasure” (6-7) など、この世の富を授けたが、“rest”のみは手元に留保した(8)。理由は、「休息」を人間に与えてしまえば、人間は神にではなく、神が与えた贈り物の方を崇め、また、自然界を作った神にではなく、自然界そのものに安らぎを見出し、結果、神も人間も互いを失ってしまうことになるからだ、と(11-15)。そして、次のようなアイロニカルな神の語りで詩は閉じる。

Let him be rich and wearie, that at least,
If goodnesse leade him not, yet wearinesse
May tosse him to my breast. (18-20)

一読して、パンドラ(の箱)の神話を模していることに気づく。ただし、「諸悪の(人類への)流出と希望の留保」という神話とは内容が反転している。一見、神話のパロディのように見えるが、この詩で人間に与えられる富は人間の「救い」という点に関しては何ら意味はなく、むしろ「休息」を与えられないことが救済の要件となる、という逆説がテーマと言える。問題は、“pulley”という、この詩のタイトル(のもつ意味)である。詩中

にはこの言葉は一切出てこないし、これを暗示する表現も曖昧である。従来の先行研究では「人間の“restlesse” (17) な状態 = (その人間自体を神のもとへ誘導する)滑車」(e.g. Margaret Willy, etc.)という解釈が一般的であったように思う。しかし、この問題の解題に当たって、同じ詩人の別のテキストの援用が有効であろうことを提案したい。その一つが、“Justice (II)”である。旧約と新約における神と人間の関係(「義」のありよう)の相違を伝えた詩である。旧約の神を「裁き」の表象である天秤と剣を手にもつ神話上の女神「ユースティティア」に擬し、対して、新約の神は(天秤と剣の代わりに)釣瓶(桶)を操るものに擬されている。前者と人間の間には常に埋めることのできない距離感があり、それゆえ神はいつまで経っても恐怖の対象でしかない。一方、後者は、向こう側から(井戸の)釣瓶のように降りてきて、「(地上の)涙の井戸」から(涙を)汲み上げてくれる(16-18)。この後者で用いられている「釣瓶(桶)」は、まさに「受肉」の記号にほかならない。*The Temple* の中には、この例に見られるように、(上から)下降する具体的なものによって(可視的に)「受肉」を暗示する比喩が幾つか発見される。結論を言うと、“The Pulley”で想定される「滑車」は、この「受肉」を表象する「釣瓶(桶)」の類を操るツール(または主体)として暗示されているのではないか(この点については既に別の論考で触れたことがある[また、J. Hollander & F. Kermode の注釈が参考になる])。このような解釈の傍証として、もう一つ、“The Pearl. Matt. 13.45”が極めて示唆的であることを付け加えておきたい(「学問」「名誉」「喜び」を手に入れた語り手が、しかし、それらのゆえにではなく、唯一天から下された「絹の撚り糸」(“silk twist” [38])[このアリュージョンに関しては「アリアドネの糸」,「ヤコブの梯子」ほか諸説あり]によって救われる、という内容)。

IV. むすびにかえて

Herbert の「受肉」に関するイメージ，とりわけ“The Pulley” (“Justice (II)”, “The Pearl”, etc.) のそれは，もう一つ，重要な表象性をもっていることを提案したい。それは，「(律法ではなく) 信仰による義」というテーマ (Rom. 3: 20-24) である。パウロが語ったこの信仰観は，単に「素朴な信仰によって誰でも救われる」という教えにとどまらず，その信仰のありよう (出自) を問う時，極めてシリアスな (あの聖アウグスティヌスに遡る) 問題を提起することになる。“The Holdfast” という詩が物語る通り，Herbert もまたこの問題に関し楽天的ではなかった。Herbert が上述の幾つかの詩で描いた「受肉」の比喩は，ただ上方から下されるだけで，(とりわけ「釣瓶」のそれでは) 人間はただそれにすがって引き上げてもらうほか術がない。言い換えれば，「救済」にあたって，人間的な所作は一切関係ない。この詩人は，宗教的な「赦し」の問題に自ら関与しようとする自我に「罪」を看ている (“The Holdfast” 6-10)。わたしたちがここで検討した「受肉」に関する比喩は，救済における「神の愛」のみでなく，「人間の無力 (の認識の大切さ)」をも暗示しているのではないか。

これらの詩はルネサンス以降の近代化の深まりの中，キリスト教を含む伝統的価値観が根底から揺さぶりをかけられている時期に書かれたものである。人間がもつ固有の力に対する希望や信頼が溢れると同時に，その力への過信や驕りに対する危惧も強くあった。Herbert の「受肉」に関する比喩は，確かに新約的な神の救いを巧みに表象している。しかし，同時に，わたしたちはこれらの比喩がもつ，人間の「驕り」に対する (ある意味で厳しい) 警鐘にも注意すべきなのではないか。